

遠藤豊吉編

お母さんの教育運動

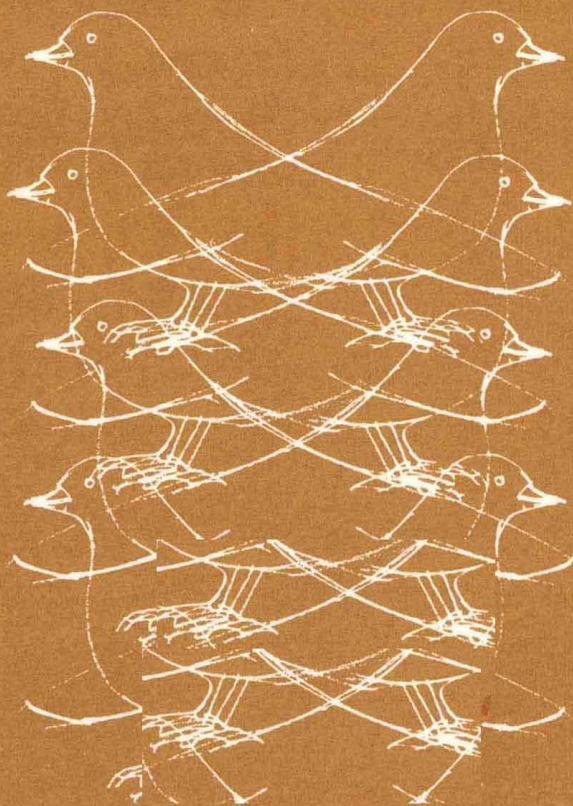
私憤から公憤へ



# お母さんの教育運動

遠藤豊吉 編

太郎次郎社



# お母さんの教育運動——私憤から公憤へ

一九八二年二月十五日・初版印刷 一九八二年三月一日・初版発行

定価——一四〇〇円

編者——遠藤豊吉

装丁者——粟津潔

カット——山本沙映子



発行者——浅川満

発行所——株式会社太郎次郎社

東京都文京区本郷五―三三―六 郵便番号 一―二三 電話〇三―八一五―〇六〇五 振替・東京五―一三七八四五

印刷所——壮光舎印刷株式会社 福音印刷株式会社

製本所——ナシヨナル製本協同組合

0036—0348—4456 ©1982

遠藤豊吉えんどうとよきち

一九二四年、福島県二本松市に生まれる。

一九四四年、福島師範学校卒業。

同年、陸軍飛行隊に入隊。翌年、復員。

以後、三十五年にわたって教員生活を送り、

一九八〇年三月、学校現場を離れる。

現在、月刊雑誌『ひと』編集委員。

主要著書——

『教室の窓をひらけ』（三省堂）

『年若き友へ』（毎日新聞社）

『小学一年一学期』（筑摩書房）

『学校はよみがえる』（冬樹社）

お母さんの教育運動——私債から公債へ……遠藤豊吉 編





# まえがき

お母さんがたのこれらの記録を編集しおわって、これはそっくりそのまま、私たち日本の母親が歩いてきた足跡でもあると思いました。

子どもが六歳になって小学校に入学する。そのときから学校とのかかわりがはじまります。新しいランドセルを背負い、ピョンピョンとびまわるわが子。そのたのしげな後ろ姿を見つめながら、母親も、はじめて出会う学校によせるひそやかな期待で心をふくらませます。それは、ついこのあいだまで乳房をふくませていたみどり子が、学校という社会にはいるまでになつたという子どもの成長の一区切りでの誇らしさと、これから学校でどのように賢く育つかという期待とがなймаぜになつた複雑な思いです。

しかし、心はずませてはじまつた学校生活は、はたして子どもにとってどんなものだったでしょうか。——やれ、数がわからない。やれ、文字が読めない。やれ、給食がぜんぶ食べられない。あれもこれもと責められて、「入学までには自分の名まえさえ書ければいい」という校長先生のことばを信じて、そのほかはなにも教えておかなかつた自分のうかつさをどんなに悔やんだかしません。ゆつたりしたおおらかな子、じつくりモノを考え、テストで時間内に「模範解答」の書けない子は、たちまち落ちこぼされてしまいます。親子でさまざまな夢をこめてふくらませた風船は、あつというま

にしぼんでしまいます。わが子が一年生になって、まだ日も浅いころ、かな文字のドリルを苦にして、「ボク、頭が痛い」と登校をしぶったその日から、母と子が苦しみながら手さぐりの歩みをはじめたのです。

ものわかりが悪く、すばやく行動できないわが子を見て、はじめ、私たちは「これは自分の育て方がまちがっていた」「わが子はどこか劣っているのでは……」と、ことあるごとに子どもを叱りつけ、ただオロオロと心配するばかりで、ひたすらわが身を責めたてつづけたのです。そのころ、『ひと』（太郎次郎社）という雑誌をつうじて遠山啓先生とめぐり会うことができました。遠山先生のことばに、私たちはハッと息をのむ思いがしました。

「算数がきらいなのは、きらいにさせられているのですよ。わかるように教えてもらえなくては、だれだって好きになれないでしょう」

いままで、どうしてこんなあたりまえのことに気づかなかったのでしょうか。そのことばに目のウロコがとれ、前途にほの明かりが見える思いでした。そうした視点で、学校のこと、教師のこと、教える中身のことに目を凝らすと、納得のいかないことがつきつきと見えてきました。

「母親は、子どもの母となったその瞬間から教育者なのです」

そういわれた遠山先生のことばは、私たちにとってじつに衝激的でした。そうなのです。私たち母親は、子どもを生んだときからことばを教え、生活のきまりを教え、ここまで育ててきました。私たち母親はまぎれもなく「教育者」なのです。これはたいへん新鮮な発見でした。子育ての主体は母親なのです。子どもの教育を、たんに学校におまかせしておけばいいという母親の態度では、子どもは

守れないことを思い知らされました。このまま黙ってはいけな、そう思いました。

そう気づいた私たちは、おなじ悩み、おなじ不安をかかえているお母さんたちといくども話しあい、自分たちの気づいた疑問をおそろおそろ学校や教師にぶつけはじめました。おずおずとまえにすすみでた母親たちの眼に、学校というもの、教師というものの実質がじょじょに見えはじめ、その眼はわが子からクラスの子へ、クラスの子から地域の子へとひろがっていきました。いままで、教育はオカミのものとされ、それに異議異論を唱えることはおそれ多いとされてきた聖域にふみこんでいき、疑問から批判へ、批判から行動へと発展していったといえましょう。

いままで、母親たちはいつても自分のほうがまちがっている、みずからを責め、傷つけ、それにジツと耐えて生きてきたのです。そのひずみが大きければ大きいほど、これらの体験をつうじて自分を発見したとき、そのマイナスは、逆にプラスに転化され、たいへんなエネルギーを発揮することになりました。身内にふしぎな力がわいてくるのを感じたのです。それは同時に、母親としての新しい生き方を発見し、その生き方を追いついていく道すじでもありました。

「まず私たちにできることからはじめましょう」と、わが子や地域の子と算数や英語を学びはじめたお母さん。家庭に子どもたちを集めて料理教室を開くお母さん。文庫づくり・塾づくりに取りくむお母さん。さらに社会の歪みに眼をむけ、さまざまな市民運動にすすみだしたお母さん、……その行動はじつに具体的で多様でした。また、じつにねばり強いものでした。一人では心もとないとき、広く呼びかければ、だれかが仲間として見つけられることも知ったのです。

お母さんがたは、全国の各地から、これらのさまざまな生きざまや実践を『ひと』誌にあてて寄せ



てくれました。どの記録も母親のひたむきな思いがあふれていて、とても生き生きとしていました。『ひと』誌九年の歩みのなかに刻まれた、これらの母親たちのかけがえのない記録のなから、ここに収録するためにわずか十七編だけをぬきだすという作業は、正直いって、とてもむずかしいことでした。この期間に、四百編という記録が書かれているのですから。

いま、教育の事態はいっそう深刻さをましてきています。子育てのこと、教育のことで悩んでいる若いお母さんがたが、私たちのときよりもずっと多いにちがいありません。かつて私たちもおなじ道を歩んでここまでできたのです。この本を読んでいただければ、そのことがきつとおわかりいただけると思います。そして、母親としてまともなぶつかっていけば、かならず道は開けることを感じとっていただけると思います。

遠山先生がくりかえし強調されていたように、母親が教育について発言することは市民としての権利であり、私憤に発して公憤にまで高められた市民運動にこそ、いまの暗い教育状況を切り拓く希望を託せるのではないでしようか。そうした母親たちによる教育運動の輪が広がっていき、これからもその軌跡がつつきと編まれていくことを願って、この本を全国のお母さんや先生がたにお届けしたいと思います。

一九八二年二月

『ひと』編集委員 上野初枝

宮島郁子



「I」もう黙ってはいられない

のろまは劣等生か——私はあきらめない……………照井陽子——12

先生、なぜ順番をつけるの……………石川充子——22

ボク、学校ではダメなの——通知票ふみつけ事件……………須田靖子——34

何がはじめっ子をかりたてたか——エセ民主的管理の恐ろしさ……………長妻治子——44

「II」学び、教えることを母親たちの手で

母親がやった「パンの授業」……………緒川久子——60

ウーフ文庫の歩み——地域の子ども・母親とともに……………長谷川立子——75

母と子で学ぶ算数塾……………原田智恵子——95

一丁目一番地、小さな英語教室……………江藤美代子——110

「III」子どもとともに育ちあろう

子どもの授業拒否に眼を開かれる……………森本糾子——124

息子と私の育ち合戦……………山本武子——136

全盲の子が自立して生きるために……………高橋キヨ子——151

さんすう二人旅……………長島淳代——160

## 〔Ⅳ〕戦争を語り継ぐ

孫に語り伝えたい、私の戦争体験……………畠中美子——184

母をにおいて、子ども四人で発つ——満州からの引き揚げ……………入江敦子——193

## 〔Ⅴ〕孤立から連帯へ

制服という名の管理に反対して……………宮島郁子——208

番号制ゼッケンはヤッパあかんやんか闘争……………二宮武子——215

母親の環をひろげよう——かながわ「ひと」の会の四年間……………上野初枝——238

解説……………遠藤豊吉——255



「I」もう、黙つてはいられない



# のろまは劣等生か——照井陽子

私はあきらまぬぞ

## のろまとはなごいらい子か

よく遊び、よく食べ、よく眠る元気な子どもが、ある日、小学校へ入学し、勉強していくうちに、いつの間にか、遅い子になった。テストの問題で考えさせられた。一年生から、どうしてこのようなわかりづらい問題が出てくるのか、あるいはわかりづらくしているのかと。まちがっている箇所を子どもとともに考えてみるのだが、しまいに親子ともどもクスクス笑ってしまいうりさまで、学校でやり残した問題をひとりやらせてみた。

「あら、学校で残したのは、わからなくてやらなかったんじゃないの？」

「うん、半分やったら、時間になっちゃったの、わかってるよ」

わかっているけれど、時間がたりないというのはどうしてか？ そのことを先生に報告したら、

「家でやれば、だれだってみなできちゃうんですよ。きめられた時間にできないのは、やっぱり能力の差だと思います。きちんと時間内にできる子だっているんだし、そんなにむずかしい問題を出し



ているわけじゃないんですから……」

と、気の毒そうに、こうおっしゃる。その時点から、自分自身へのきびしい問いかけが始まった。私以外の何人かの母親たちも、現在のテスト体制に疑問を持ったものもいるが、時間がたつにつれ、あきらめるよりほかないと、ワークブックや塾に走った。

子どもの成績がよくないということについては、たとえ頭のなかで、「たかが一枚の紙きれで人間が評価されてたまるものか」と思っても、現実には自分の子どもが差別されていくのをみれば、親の気持ちとしてはなにがなんでも成績をよくしなければという考えに傾いていくのも、私には理解できる。それにしても、もうちょっと、しばらくそこにふみとどまって、考えてもらいたいものだ。それについて語ろうとすれば、「教育ママ」と言われたり、「ずいぶんお暇ね」と皮肉られたり、母親自身が足のひっぱりあいとなる。

一般に、先生がたにも、親たちにも、のろまは劣等生だという先入観のあることがよくわかった。テストは子どものわかりぐあいをみるためののだと、どの先生もおっしゃる。でも、教えもしないことやことばがテストに出ても、先生は、それを指摘されるまで知らずにいたり、気にもとめないというのは、どういうことか。——学校で一括購入される市販のテストを当然のごとく使用しているからではないか。また、子どもたちに渡すまえに、そのテストに目を通していいのかともいいたいくなる。

よく考えるよりも、パッパッと要領よく○×をつけていく技術を要求されるテストに、子どもたち自身も嫌気がさしていることを見逃すわけにはいかない。



遅いということはいったいどういうことなのか。そして、能力の差とはどういうことをいうのか。あれこれ考えめぐらす日が続いた。こんなとき、父親というのは、自分の仕事の忙しいこともあるうが、ずいぶん理性的に眺めていられるものだと、つくづく思ったしだいである。少しは私の身にもなつて考えてくれてもよさそうなのなのに。「あわてるな、いまによくなる」と、こうだ。

私としても、ほうつとけるものなら、そうしなかったのだが、そうもできなかった。なぜなら、遅い子は置いてきぼりにされて、勉強がおろそかになりがちだからである。

勉強するということは、常日ごろの見聞きもさることながら、学校で教わったことを自分で考え、わからないところを質問しながら、だんだん知識を広げていくものだと思っていた私は、テストで、まずつまづいた。二年生ごろの算数の問題になると、一問ずつゆっくり考えて解いていく子は、どんどん遅れていく。

個人面談などのおり、「どこそこがわかっていません。ここもちょっとどうか」などと先生から注意されるのだが、子どものわからないところは直接、子どもに教えてくださるものだと思っていたのに、結局、家で教えこまなければならぬことだったのである。すると、私はその役をしなければならぬ。教科書を見ても、彼女が納得いくように書いてないし、見当つきかねて、本屋を捜しまわつたすえ一冊の本を買い、私自身の頭のきりかえをしていくことになった。生まれてはじめて、算数というのはおもしろいものなんだという理解はできたが、自分で理解するのはいいが、子どもに納得いくように順序よく教えることは、私も含めて、このさき、どの母親もやれる自信があるのだろうか。ある日、子どもといっしょに風呂にはいりながら、きいてみた。